

【 新入所員紹介 】

外国語学部スペイン語学科 助教

モラレス ラマ アレハンドロ

Alejandro Morales Rama

I started my academic life many years ago as an English Philology undergraduate. As such, I nurtured my love for language and literature. Currently, my field of expertise is Japanese Literature and comparative cultural studies. I am particularly interested in the works of the novelist and playwright Izumi Kyoka (1873-1936), a giant of the fantastic genre in Japan. I have researched particularly about the problem of discrimination in his novels and how this societal malady is intrinsically related to the author's aesthetics. Let me shed some light in the way my research interconnects with my role as an educator in Kanagawa University, and as a member of the Center for Language Studies.

As an educator, I understand literature and other media elements primarily as tools to understand culture and the human experience. Through my academic career I learned to look at those works from a variety of perspectives, but my particular interest in societal issues always drove me towards certain theoretical paradigms that now I can pass on to my students, regardless of whether the stories they study or films they watch are in Japanese, English or Spanish.

In terms of language, I must add that besides researching Izumi Kyoka, I have also translated

some of his works into Spanish, which were compiled into a volume and published in Spain in 2014. The act of translation for me was the result of the collision between my interest in languages and my obsession with Izumi Kyoka's works. I have recently started to investigate about the act of translation, the relation of language and culture, as well as the problem of ecology thanks to my collaboration with Professor Murai from the English Department. I hope to continue this line of investigation through the Center for Language Studies from now on.

国際日本学部国際文化交流学科 助教

ヘーブ ステファン ヨセフ

Heeb Stefan Josef

言語研究センターのみなさま、初めまして。スイス出身、国際日本学部国際文化交流学科のヘーブ・ステファンと申します。この度、入所希望の背景になりました言語に関する『西欧言語を一括で学ぶ』というプロジェクトについてご紹介させていただきます。

その前、自己紹介としては、言語と共に社会と思想について関心を持ってやってまいりました。通常型の専門分野は社会経済制度の比較研究であり、特に教育制度から雇用制度への移行、日本の事例ですと新卒一括採用制度になっています。よ

り幅広い生涯研究テーマとしては、ゼミでも行う「西洋とは何か」という問題について歴史上の文明としての西洋と現代社会的実態としての西洋について考えております。

それに関わるものでもあります。上記の言語教育と研究プロジェクトでは日本語母語話者のため、西ヨーロッパ言語の主な類似点と差異点の範囲と質の概要を目指す目処です。所員みなさまのどなたかとそれについて交流や意見交換の機会がありましたら大変幸いに存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

経営学部国際経営学科 特任准教授

木村 恭大

Takahiro KIMURA

はじめに、この度は神奈川大学言語研究センターの一員としてお迎えいただき感謝申し上げます。今回は新規所員紹介ということで、私の専門分野や、現在の興味や研究、それに至る経緯などをお話できればと考えております。

私は社会言語学・語用論分野を専門に研究しています。特に学生時代より興味を持っていた「ポライトネス」の観点から人々の自然会話を分析しています。現在では「スタンステイキング」の理論を用いたり、非言語行動に着目したりするなど、多角的にポライトネスを捉えていこうと考えていますが、そもそものきっかけは、学生時代、言語

の社会的機能という考え方に会い、人はことばを使ってどのように人間関係を維持しているのかに興味を持ったことでした。

学部生の時はアルバイト先での会話を録音したものをデータとして用い、日本語におけるポライトネス方策を観察しました。アルバイト先、つまりは職場では、共通の目的を達成するために、職員同士は常に関係性を維持する必要があり、それを意図したと考えられる発話を多く観察できました。一方で、発話者の発言に重きを置いた理論を用いてデータの分析を行った結果、聞き手の反応などにあまり注目しなかった点や、録音データの

みを用いた結果、非言語的な要素を考慮できなかった点など、問題もあったものでした。

その後は、会話の録音だけでなく、その場면을録画として残したものをデータとして分析し、考察を続けています。具体的には、私の出身大学の学生と教員が中心となって毎年発行している学生創作誌の編集会議を録音・録画し、ポライトネスの観点から分析を行っています。こちらも会議場面ということで、会議の目的が共有されており、その達成に向けた話し合いがもたれていることから、ポライトネスの意図やその解釈に関連していると考えられる発話が多く観察できました。また、参加者の学生の多くは日本語を母語としているのに対し、教員は英語の母語話者で、会議全体は基本的に英語を用いて進行している点から、一般的に英語圏などの文化でポライトであると考えられている行動に加えて、日本文化圏でポライトと考えられるような行動が同時に観察できる非常に興味深いデータです。その中でも会話の進行に大きな支障がない点も見られ、ポライトネスの普遍性といった点も含めて考察を続けています。

また、現在では言語人類学とも接点のある、スタンステイキングの理論もデータ分析に用いています。人間は言語・非言語行動を通して自身の立場、つまりスタンスを表明しており、会話の中でそれを調整しているといった理論です。この立場の調整という考え方がポライトネスと関連しているのではないか、という観点からも研究を始めました。

そのような折、新型コロナウイルスの蔓延により、オンラインツールを使ったコミュニケーションも広がり、先の学生創作誌の編集会議も対面方

式からオンライン形式に変更されました。この会議の様子も、録画をさせていただき分析を続けています。対面とオンラインでの会話を、会話の形式以外ほぼ同一の条件で比較できる非常に貴重なデータを収集できました。

現在はそのオンライン形式での会話分析を中心に、過去のデータとの比較を含め、自然会話におけるポライトネスやスタンステイキングを観察しております。また、私の以前の職場でのオンラインアプリケーションを使った文字によるやり取りもデータとして収集しており、今後は実際の会話だけでなく、文字によるコミュニケーションも観察していきたいと考えております。

まだまだ研究者として駆け出しの身でございますが、上記興味のもと研究を進めていく所存です。皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。